

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 17 日現在

機関番号：34415
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2009～2012
 課題番号：21730572
 研究課題名（和文）感情発達と関係性に注目したアレキシサイミア形成要因に関する実証的研究
 研究課題名（英文）Empirical study of factors in the development of alexithymia focusing on emotional availability and attachment style
 研究代表者
 馬場 天信（BABA TAKANOBU）
 追手門学院大学・心理学部・准教授
 研究者番号：00388216

研究成果の概要（和文）：本研究では、心身症患者に特有とされるアレキシサイミアの形成要因を探るために、愛着スタイルや母子関係、情緒応答性の特徴を明らかにすることを目的とした。調査Ⅰから調査Ⅲの結果から、アレキシサイミアの形成要因として、母親の拒否的養育態度が大きく関係していることが明らかとなり、見捨てられ不安の強さを特徴とする恐れ型に分類される愛着スタイルが特徴的であることが明らかとなった。また、アレキシサイミアの情緒応答性については、覚醒度や対人希求性、強度の認知に関して問題を有していることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to investigate the attachment style, past mother-child relationships, emotional availability try to find the factors in the development of alexithymia. The results demonstrated that some factors (mother's negative parental attitudes, fearful and preoccupied attachment style, wrong perception of emotional activity) influenced the cause of alexithymic tendency.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|----------|
| 2009年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 2010年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 2011年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 2012年度 | 400,000 | 120,000 | 520,000 |
| 総計 | 1,900,000 | 570,000 | 2470,000 |

研究分野：臨床心理学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：アレキシサイミア、感情発達、愛着、対人関係、母子関係

1. 研究開始当初の背景

アレキシサイミア（Alexithymia）は、Sifneos(1973)によって提唱された心身症患者に多いとされるパーソナリティ特性のことを指しており、自己の感情への気づきの乏しさ、感情描写の困難さ、外面志向の認知様式、夢に代表されるような想像性の貧困さ、を特徴としている。元来、心身症に共通したパーソナリティとして捉えられていたアレキシサイミアであるが、調査研究の蓄積に伴い、現

在では心身症に限らずパーソナリティ障害や不安障害、摂食障害といった、幾つかの精神疾患にも共通して認められる「感情制御の障害」として位置づけられている（Taylor et al.,1997）。

アレキシサイミアに関する実証的研究は Toronto Alexithymia Scale-20 (TAS-20) が完成した 1990 年代後半から国際的に開始され、初期の研究では疾患群での疫学調査報告が主なものであった。しかしながら、2000 年代に入り、感情処理メカニズムの解明を意

図した実験的研究が増加し、近年では PET や fMRI を用いたアレキシサイミアの脳内基盤解明を意図した試みが幾つか報告されている現状にある。

一方、これまでの研究において臨床的にその重要性が指摘されながら数えるほどしか報告されていないのがアレキシサイミア形成要因に注目する研究である。家族内における感情コミュニケーションの問題や乳幼児期の母子関係や養育体験であるが、過去に扱われた研究では、幼少期の家族内感情コミュニケーション (Berenbaum & James, 1994)、幼少期の家族機能不全因子 (King & Mallinckrodt, 2000)、幼少期の養育体験 (Fukunishi & Paris, 2001)、成人愛着スタイルとの関連 (Wearden et al., 2005) など数例のみであり、いずれも懐古的調査研究であり、面接法による聞き取りなどを行った質的な研究は皆無である。

一方、投影法的な Family System Test を用いた検討では、アレキシサイミア傾向者の家族は、凝集性が高く、葛藤状況において纏綿状態に陥り、お互いが感情的に巻き込まれていることや、母親の階層性(影響力)が高く、現在の親子関係において過干渉や過保護という問題が生じていることが明らかとなっている(馬場・佐藤, 2003; 馬場・川田他, 2003)。質問紙調査を含めてのこれらの報告は、アレキシサイミア傾向者の現在の力動関係に注目した報告であるが、乳幼児期から青年期に至るまでのアレキシサイミアの親子関係や情緒コミュニケーションの在り方を明らかにしていくには量的研究と質的研究の両面からのアプローチが必要不可欠である。

現在、アレキシサイミア概念は精神医学、精神分析学、臨床心理学、感情心理学、健康心理学、乳幼児発達心理学、と幅広い領域で注目されている。自己の感情に気づき、他者の感情を読み取ることが困難であるという特徴は、自閉症スペクトラムやキレル子どもの在り方と類似点が多い。アレキシサイミアの観点から愛着形成や情緒応答性の特徴とそれに基づく形成プロセスを明らかにすることで、心理療法実践に新たな知見を提供するのみならず、教育・福祉現場で問題となっている感情教育プログラム開発への応用が期待できるであろう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、親子関係や愛着関係、情緒応答性に注目し、量的・質的研究の両面からアレキシサイミアの形成要因について考えられる仮説を提起することである。具体的には3つの調査を実施し、アレキシサイミア傾向と現在の愛着スタイルや就学前母子関係との関連性の検討(調査I)、アレキシサイミア傾向者の乳幼児写真に対する情緒応答性の検

討(調査II)、愛着スタイルインタビュー実施によるアレキシサイミア傾向者の愛着スタイルの質的検討(調査III)を行い、それぞれの特徴を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究における調査対象者は全て大学生とし、調査Iから調査IIIまで全て調査協力者には謝金が支払われた。調査協力者の募集に関しては十分なインフォームドコンセントを行い、調査IIと調査IIIに関しては同意確認として捺印処理も行った。量的検討を行った調査Iと調査IIはSPSSを用いて統計処理を行い、調査IIIについては質的な検討を行った。本調査ではアレキシサイミア傾向を測定する尺度として国際的にその信頼性と妥当性が確認されている Toronto Alexithymia Scale-20 を全ての調査で用いた。

(1) 調査I

2年間に渡る質問紙調査(調査期間: 2009年12月~2011年2月)では、最終的に203名(男性84名、女性119名)から調査協力が得られた。調査内容は、アレキシサイミア傾向を測定する国際基準尺度である Toronto Alexithymia Scale-20 (小牧他, 2003)、成人愛着スタイル尺度 ECR-GO (中尾・加藤, 2004)、一般他者成人愛着タイプ尺度 RQ-GO (加藤, 1999)、就学前母子関係尺度(酒井, 2001)を用いた。また、同時に心身症状の一つである過敏性腸症候群の症状スケールも使用した。

(2) 調査II

I FEELE Pictures を用いた調査IIでは、197名(男性59名、女性138名)に調査協力を得られた。乳幼児写真ツール写真に対する評定調査を行い I FEELE Pictures の日本版 30枚を使用し、写真ごとに、最もあらわしていると思われる感情の言葉を記述させ、その後①快-不快評定、②感情強度、③対象希求度、④感情を表す単語の詳しい説明を行わせた。なお、全評定終了後改めて11の感情カテゴリーを提示し確認評定させた。調査の実施は集団法で行われ、最低1~最大8名で小実験室にて実施されそれぞれ I FEELE Pictures の原版をめくりながら評定を行わせた。

(3) 調査III

愛着スタイルインタビューを行った調査IIIでは、愛着の質を評価する面接法として愛着スタイルインタビュー (Attachment Style Interview-Japan: ASI-J) の日本版を採用した。このインタビュー法は実施者認定講習会への参加とその後の評定訓練によりインタビュー実施者認定許可を得る必要があり、本研

究では最初の2年間でその認定を受けることができた臨床心理士1名(女性)がインタビューを実施した。インタビューはASI-J実施の同意が得られた大学生のうち事前に実施したTAS-20のカットオフポイントを参考にアレキシサイミア群と非アレキシサイミア群に分類してインタビューを実施した。なお、非アレキシサイミア群の選別はTAS-20得点が低い群から順に選択した。インタビュー実施対象者の内訳は18~22歳、男性12名、女性11名、アレキシサイミア群11名、非アレキシサイミア群12名の合計23名であった。他インタビュー調査は、ASI-J実施のインフォームドコンセント用紙への回答、TAS-20への改めての回答、ASI-Jインタビューの実施、幼少期の両親からの躰に関するインタビュー(ASI-Jとは別)、I FEELE Pictures(調査II実施と同様)を行い、所要時間は2時間程度であった。インタビューの実施は小実験室で臨床心理士と対面で実施した。

4. 研究成果

(1) アレキシサイミアと愛着、養育態度

大学生203名を対象とした調査Iでは、アレキシサイミア傾向は「見捨てられ不安」や「親密性回避」と有意な正の相関が認められ、更に分散分析によって「恐れ型愛着タイプ」との関連性が高いことが明らかとなり(Table 1とFigure 1を参照)、Wearden et al(2003, 2005)の先行研究と一致していた。また、就学前の母子関係については「拒否的母子関係」と有意な正の相関が認められ(Table 2)、「いつか見捨てられるのではないかと思った」「助けて欲しいときに、母親は助けてくれなかった」「私が泣いても、母親は関心がなかった」「私は同じことをしていても、怒られたり、怒られなかったりした」といった、母親の無関心や情緒的反応の一貫性のなさがアレキシサイミア形成要因として関連していることを示唆した。

Table 1 TAS-20とECR-GO, RQ-GOとの相関

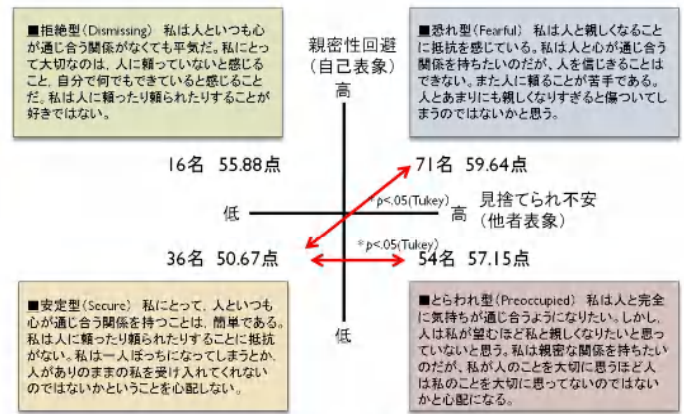
| | 見捨てられ不安 | 親密性回避 | 自己観得点 | 他者観得点 |
|----------|---------|---------|----------|----------|
| TAS-20合計 | .556 ** | .291 ** | -.382 ** | -.243 ** |
| 感情同定困難 | .525 ** | .156 * | -.352 ** | -.244 ** |
| 感情描写困難 | .384 ** | .432 ** | -.371 ** | -.278 ** |
| 外面志向認知 | .184 * | .075 | -.049 | .036 |

** $p < .01$ * $p < .05$

Table 2 TAS-20と就学前の母子関係尺度との相関

| | 安定的関係 | 拒否的關係 | アンビバレント関係 |
|----------|-------|---------|-----------|
| TAS-20合計 | -.077 | .284 ** | .164 * |
| 感情同定困難 | -.032 | .283 ** | .182 * |
| 感情描写困難 | -.036 | .258 ** | .112 |
| 外面志向認知 | -.101 | .017 | .015 |

** $p < .01$ * $p < .05$



解析: 1要因4水準の分散分析 ($F(3,176)=7.85, p<.01$)。

Figure 1 RQ-GO(成人愛着タイプ4分類)からみたTAS-20得点の比較

(2) 情緒応答性とアレキシサイミア

感情表出を伴う乳幼児の情動表出写真への情緒応答性に注目した調査IIIでは、TAS-20カットオフポイントを基準にアレキシサイミア群69名とカットオフポイント60点未満を非アレキシサイミア群127名として分割して、情動写真に対する主観評定についてそれぞれt検定を行った。その結果、欲求がP反応となる6番の対象希求度、眠気がP反応となる25番の感情強度、喜びがP反応となる27番の感情強度、疲れがP反応となる30番の対象希求度において有意差が認められた。すなわち、アレキシサイミア群は一部の刺激に対する対象希求度を低く見積もり、弱い感情価については覚醒度を高く感じたり、表出度の高い感情へ低い覚醒度を感じるなど強度の評定一致が得にくいものがあることが明らかとなった。また、回答として挙げられた感情語についての感情価カテゴリーデータでの両群における選択頻度の違いについては一部の乳幼児の感情表出写真で有意傾向が認められたが、写真属性ごとで特定感情価に限定された認知の歪みは示されず、質的な評定方法を感情価評定から「関係性評定」におきかえて評定しなおす必要があることが示唆された。

以上の結果から、アレキシサイミア群は感情を表出している乳児の写真に対して、覚醒度や表出度、強度の認知という点で非常にミクロな点では情緒の応答性に問題があることが示唆されたが、感情価を極端に取り違えて認知する程ではないことが示唆された。日常生活に適応できている健常な大学生である故の結果とも考えられるが、今後は関係性評定基準を用いて評定をしなおし、アレキシサイミアの内的対象イメージの視点から情緒応答性の問題を検討していくことが必要と考えられた。

(3) 愛着スタイルとアレキシサイミア

臨床心理士によって実施されたASI-Jの面接評定では、非アレキシサイミア群と比較し

アレキシサイミア群は「極めて不安定恐れ型」(3-1)に分類される割合が高く、(1)に報告した質問紙調査の結果と重なる点が多いことが明らかとなった。一方、非アレキシサイミア群で「かなり不安定恐れ型」(4-1)に分類された者も数%あり、感情への気づきや表出が強いという特徴は必ずしも愛着スタイルが安定しているとは言えない可能性も同時に示唆された。なお、上記の面接者の評定については全て終了しているが、ASI-JはASI日本支部の国際認定評価者がその評定確認作業を済ませて確定評定となる。現在、その評定確認プロセスに入っているが、最終決定前であるため具体的な数値データの公表は控えることとした。本調査では群分けをTAS-20得点の高い群と低い群での比較を行ったが、中間群が含まれておらず、今後はカットオフポイント群のなかでも中間群に位置するデータを追加して検討する必要があると考えられた。

(4) 本研究のまとめと今後の課題

本研究からは、アレキシサイミアが有する愛着スタイルは見捨てられ不安の高さを反映する「恐れ型」もしくは「とらわれ型」と関係が深いことが明らかとなった。また、就学前の母子関係における母親の無関心や情緒的反応の一貫性のなさとその形成要因として重要となる可能性を明らかにした。これらの結果は、質的な検討を行った愛着スタイルインタビューでも支持され、極めて不安定な愛着スタイルとして現在の対人関係に反映されていることが明らかとなった。情緒応答性の側面については、感情価を完全に取捨するほどの応答性の問題があるとは言えないものの、覚醒度や表出度、対人希求度などのマイクロな認知レベルでの不一致が示唆された。

本研究では大学生を対象としてアレキシサイミア群と非アレキシサイミア群による比較検討を行った。いわゆる臨床群ではないにも関わらず、主観的に認知している愛着スタイルや実際の対人関係には見捨てられ不安の影響が色濃く反映されていることが明らかとなった。また懐古的調査という限界はあるものの、母親の養育態度による影響が大きいことが実証された。アレキシサイミアに関する研究が臨床心理学的に寄与するのは、このような特徴のあるクライアントへの臨床実践上の工夫、そして教育・福祉現場における予防教育にあると言える。アレキシサイミア傾向のクライアントには内省的な心理療法は適さないとの見解がなされてきていたが、本調査結果からは「見捨てられ不安」という愛着上のテーマに焦点をあて、対人関係のあり方に頂点をあてて介入することで心理療法による関わりが可能となることを示唆したと言える。

一方で、情緒応答性については乳児の感情

価の認知における歪みは一部で認められる程度に留まっており、関係性評定で評定しなおすことでよりアレキシサイミアの情緒応答性の問題が感情価のラベリングとは異なる側面から明らかになりやすいのではないかと考えられる。

本研究では、特にアレキシサイミア傾向者の愛着スタイルに注目し、対人関係の実際についてインタビュー調査を行った。最終評定の確定が得られていないことから本報告書の公表は控えざるを得なかったが、実際の臨床的介入を視野にいれた場合には、実際の対人関係におけるパターンの特徴を記述していくことは重要と思われる。また、情緒応答性に関する研究については、現在、「関係性評価カテゴリー」にて再度評定をし直している最中である。これらの結果をもとに、心理療法の適用が困難とされるアレキシサイミア傾向者にどのような介入の工夫が必要となるのかについてそのプロトコルを提案できるようになっていくことが今後の課題と言えるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計2件)

- ① 馬場天信 (2010). アレキシサイミアと成人愛着スタイル、就学前母子関係の関係 日本心理学会第74回大会、2010年9月22日、大阪大学
- ② 馬場天信、消化器症状の悪化に影響を及ぼす諸要因の検討—アレキシサイミア、愛着スタイル、就学前母子関係からの検討、日本健康心理学会第23回大会、2010年9月11日、江戸川大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

馬場 天信 (BABA TAKANOBU)
追手門学院大学・心理学部・准教授
研究者番号：00388216

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし